《選を終えて》

論文の部

北海道自然保護協会会長
八木　健三

論文募集に、六十五人もの予想以上の方々に応募していただいたことは感謝に堪えない。教育者、研究者、専門家、公務員、会社員から、大学生や高校生、主婦など広い分野にわたり、また道外からも数人の応募があったことはうれしい。

これらの論文は、それぞれの体験や観察、知識に基づいて自然をとらえ、その自然観に立脚して人々と自然の共存をはかり、自然を守り育てる方策を論じたものが多い。専門的な提言に交じり学生諸君の若々しい論議も展開され、読んでゆくわれわれが大いに啓発された。

こうして五人の審査員が精読した結果に基づき、まず十数編が選ばれ、これについて選考委員会が行われた。力作でその差はわずかなため、選考はなかなか困難な作業であった。

推されたのは、坂本芳明氏の「自然は偉大な教育者」である。札幌市立円山小学校で子供たちとともに自然とのふれ合いに力を注いでいる体験から、暴力やいじめなど教育荒廃のかなりが緑の不足、自然とのふれ合いの欠如にかかわっていることを指摘し、自然教育の重要性を強調する。ありふれた身辺の自然の観察やふれ合いから、二十一世紀を担う子供たちが自然を愛し育ててゆくことを期待する。

佳作の萱野茂氏の論文は、祖母との対話から説きおこし、アイヌ民族の自然観と自然保護のあり方を謳(うた)い上げた異色の作品で、さすが二風谷アイヌ文化資料館長ならではと敬服させられる。そこには、人々とヒグマやシカ、シマフクロウからカラスとの生き生きとした共存の途が提言され、説得力のある重厚な文である。前記論文とは優劣がつけ難かったが、より一般的な視点を重視するということで坂本氏が入選した。

種市佐改氏は、釧路で多年、自然を研究した成果を踏まえ、森林と湖の保全について具体的な提案をしている。森林について木材以外の効用を総合的に考慮せよとの論旨は傾聴に値しよう。

伊藤隆一氏は、豊富なフィンランド生活の体験から、気候風土の近似する北海道でも北欧式の生活様式をとり入れ、自然との共存をはかる新鮮な提唱をしている。流れるような文の美しさも印象的であった。

惜しくも選にはもれたけれど、自然教育や新しい自然づくりを説く吉田徳夫氏、庭のクロッカスの花日記から自然教育をすすめる野田豊子氏、草地研究の成果からササ原や牧草を論じた西村格氏、林業の経験から森林の育成を論じた小関哲宏、坪井修嗣の両氏、環境行政の立場から提言した鍛治哲郎氏等々の論文も印象にのこったものである。ここに入賞作四編の全文と、選外佳作八編についてその要旨を掲載した。

ここに、応募された方々のご努力に厚く感謝して寸評を終える。